

私の一冊

歯科衛生学科 森野 智子先生

三浦 しをん 著 『舟を編む』

小鹿図書館 913.6/Mi 67

『舟を編む』は2006年に直木賞を受賞した三浦しをん氏の著書で、2012年本屋大賞第1位受賞作ですから、多くの方がご存じのことでしょう。三浦作品の持ち味は、爆笑日常風景を取り入れつつ、1つの仕事や物事に真剣に取り組む人たちを丁寧に描く点だと感じています。

本書は、編集者として出版社に就職することを志望しておられた著書の執念を感じるような、緻密な取材をもとに構成された辞書編纂の物語です。本書が描く15年にわたる辞書編纂の物語は、即ち言葉との格闘の日々の記録です。辞書といえば、小学生の頃、読む本に事欠いて、国語辞典(正式名は不明)を読み出したら、意外にも面白くて夢中になり、数日間読み続けたことを思い出しました。本書は、大人になった私(社会における言葉の重要性和、自身の言葉を操る能力の低さを痛感している)に、容赦なく言葉の重要性を突き付けてきます。更に、曖昧なまま眠っていたものを言語化することの難しさを思い知らせようと迫ってきます。読むたび、自分の言語化能力の低さを思い知り、自己嫌悪に陥ることの繰り返しです。そんな厳しい現実を突きつけられるにもかかわらず、繰り返し読んでしまう理由は何でしょう。

それは、松本先生、荒木さん、タケおばあさんに代表される年長者の懐の深さ。馬締と香具矢はじめ複数カップルが紡ぐほほえましくも奥が深い恋愛模様。時折登場する、丁寧に調理された体に良さそうな食べ物。社会の理不尽さに立ち向かうために必要な歳月の描写。どんな時も、無駄に過ごしてはいけないと戒める、登場人物たちの心の声。そして、水と油のような性格をした、馬締と西岡の突拍子もない奇想天外の友情物語。これらのユーモアとペーススが絶妙に配分されていて、声をあげて笑い出しそうになるのをこらえて(実際は、こらえきれず声を出して笑います)読み進めた後には、感動の涙があふれてきます。この読後感。さすがに何とも言えない充実感があるからです。 そうだ、もう一回読んでみよう。

最後に、お気に入りの一文を紹介します。登場人物の岸辺から「私のどこが、辞書づくりに向いているんでしょうか。」と問われた馬締が返した言葉は、「要領よく、ものを所定の場所に収めていけることです。」でした。「えっ!」…そこですか、と岸辺は拍子抜けしたようです。

うれしい。なぜって、私、言語能力は未熟ですけど整理整頓は得意なほうですから(笑)。